直言

手術をやってあげるのではなく させていただく気持ちを大切に

離島・へき地病院への応援をスタート

福江 眞隆
古河病院院長

『ALIFE～愛しき人～』というテレビドラマが、成田富里徳洲会病院で撮影されています。主人公の木村拓哉さん演じる外科医は、米国帰りで腕も立ち、患者さんやスタッフにも優しいナイスガイです。現実にはあり得ないと思いながらも、つい見入ってしまいます。私が外科医を目指したきっかけは父の影響でした。父は海軍兵学校を出て終戦後、九州大学医学部に入学。38歳で福岡県筑豊の小さな町で、19床の有床診療所「福江外科胃腸科」を開業しました。

最後まで偉大だった父親と古河病院開院をともに喜ぶ

優しい父でしたが、長男には厳格でした。私は3人兄弟の末弟。正月に真ん中の兄と些細なことで喧嘩になりました。父は勉強をしている長男をわざわざ私たちの前に引っ張り出し、ビンタをしました。私は真面目な兄が叩かれたことに心から反省して「お兄ちゃんを叩かないで。ごめんなさい、もうしません」と大泣きしながら懇願した思い出があります。私たち弟にも心底、痛かった思い出です。

父の学位論文は「胃潰瘍がストレスでできること」。モデル動物の犬にストレスを与えて胃を摘出し、胃潰瘍ができていることを証明しました。その代償に、瞼には犬に噛まれた傷痕がありました。また、1年間に腰椎麻酔以上の手術を個人で400件こなした時もあり、全身麻酔で胃切除術も施行していました。術後トラブルになった例は、耳にしませんでした。

ある日、意識障害の若い男性が救急で運ばれてきました。奥さんも原因がわからないと言い、補液をして落ち着き、数日で退院しましたが、また同じ症状で入院。父は奥さんを詰問し麻薬使用を白状させました。家族にも、患者さんに対しても愛情のある人でした。そんな正義感の強い父を見て自然に医学部を目指しました。

古河病院開院時に、足腰が弱っていたため車いすで来てくれた父は、病院をじっくり眺め「2億円だな」とひと言。最初は何のことかわからなかったのですが、「月2億円稼がないと黒字にはならないぞ」という意味でした。実際、当院が黒字転換した時は月2億円近くの医業収入になっていました。

そんな父も8年前に他界、葬儀では徳洲会グループに本当にお世話になりました。

現在、当院の外科は常勤医師4人体制になり、かなり自由が利くようになりました。私はたいした外科医ではないのですが、恩返しの意味で最近、離島・へき地の病院に応援に出ています。

初心忘れることなく目の前の患者さんに対し全力を尽くす

術後に元気に退院する患者さんを見送る時、この職業についてとても良かったと思います。それも看護師やコメディカルだけでなく、事務職も含め当院にかかわる全職員の努力があればこそだと感謝しています。

手術がうまくいくには、さまざまな要素があります。準備は最も大切ですが、患者さんやご家族に対する説明と同意も重要です。合併症や偶発症などの可能性を伝えるだけでなく、相手に対する真摯な態度が不可欠です。患者さんと信頼関係を築いていれば、集中力を発揮することができ、難しい手術を成功に導くことができます。

腕の立つ外科医と仕事ができることは喜びです。グループ病院のある医師に、当院で膵頭十二指腸切除術を執刀していただきました。迷わないメスさばき、超音波メスも駆使して3時間以内で手術は終了。手術の前立ち（第一助手）を行っていて何とも言えない爽快感がありました。

外科医の基本として、「手術をやってあげるのではなく、手術をさせていただく」という気持ちが大切です。できれば切らずに治すのが最も腕の立つ医師だと思いますが、残念ながら手術でしか完治を望めない患者さんがいます。その方たちに、標準的で安全で根拠ある手術を提供したい。医療、手術に絶対はありませんが、より安全に受け入れられる医療のあり方を追求する姿勢は大切です。JCI（国際的な医療機能評価）や病院機能評価は、そのための大事なツールだと思います。

先日、大学の同門会で、私が以前勤めた病院で働いている先輩が「20年前に福江が手術した食道がんの患者さんが、今でも元気に俺の外来に来ているぞ」と嬉しそうに教えてくれました。

ありがたく、思わず目頭が熱くなりました。初心を忘れず、目の前の患者さんのために、皆で頑張りましょう。

（1面から続く）

質落とさずオムツ管理　特養逗子杜の郷

特別養護老人ホーム逗子杜の郷（神奈川県）の田邉笑美子施設長は「利用者のアウトカムを落さず、オムツを定数化し、コスト削減をすることで施設運営に貢献～入居者の気持ちに寄り添って～」がテーマ。オムツの必要枚数を算出し定数化するとともに、オムツのコストを算定した。

また、個人オムツ表を作成し使用状況をチェックしたり、勉強会を開いたりすることで、皮膚トラブルの発生率低下とオムツのコスト削減を実現。職員のコスト管理意識の醸成や意見交換の活発化などにつながったと報告した。

診療時間早め待ち時間減　沖永良部徳洲会病院

沖永良部徳洲会病院（鹿児島県）の賀来千勢子・看護副主任のテーマは「内科診療開始時間の変更による待ち時間低減」。多くの医療機関にとって待ち時間対策は重要な課題だ。同院は内科の待ち時間低減を目標とし、「送迎バスが到着する午前9時前後に集中する患者さんが分散すれば、待ち時間が低減するのではないか」との仮説から、内科の診察開始時間を午前9時から8時30分に変更。その結果、平均で15分短縮できた。賀来・看護副主任は、今後も外来待ち合いスペースの工夫などによる待ち時間対策を継続していく方針。

研修委員会の取り組みを発表する佐土原副院長

早期警戒スコアを導入　岸和田徳洲会病院

岸和田徳洲会病院（大阪府）の深野明美・副看護部長は「入院患者の発見時CPA患者の低減」と題し発表。同院は発見時CPA（心肺停止）患者さんを限りなく0件に近づけるため、急性期疾患の重症度評価の標準化を目的に、英国発の早期警戒スコアであるNEWSを15年5月に導入した。

NEWSは呼吸数や収縮期血圧、心拍数、意識レベルなど7指標を測定し、点数に応じてリスク分類するもの。院内での教育や監視体制の強化などに取り組んだ結果、発見時CPAの減少傾向を確認できた。「NEWS導入により発見時CPAは、直近9カ月は0件です」とアピールした。

電話訪問の目標達成　宇和島徳洲会病院

宇和島徳洲会病院（愛媛県）の林明子・副看護部長は「救急搬入後帰宅患者への電話訪問実施率の向上からつながる医療安全」を発表。電話訪問を定着させるために、作業フローを作成したり、対象除外患者さんの項目を統一したりした。病院で掲げた目標には届かなかったものの、徳洲会グループの目標は達成した。

篠崎院長から笑顔で賞状を受ける湘南藤沢病院スタッフ

多職種連携の外科カンファ　鹿児島徳洲会病院

鹿児島徳洲会病院外科の立野太郎医長は「少数外科医でアウトカムを落とさずに手術症例数を増やすための取り組み」を発表。同院は限られた人数の外科医が、手術を必要とする多くの患者さんに適切に施術していけるように、外科の術前術後カンファレンス（会議）に、医師以外のさまざまな職種が参加する〝多職種連携外科カンファレンス〟を開始。その結果、手術症例数が増加した。「多職種の自律的な診療への関与が外科医の負担を軽減し、合併症を増やすことなく手術症例を増やすことができたと考えられます」と報告した。

投票対象外の特別枠として、徳洲会グループ専門研修部会の佐土原道人部会長（岸和田病院副院長）が「研修医マッチング者数減少に対して行った研修医募集活動業務の手順の見直しと組織改革とその結果」をテーマに発表。徳洲会グループ研修管理委員会は、13年に初期研修医のマッチング者数が減少したことを受け、14年から医学生向け説明会の運営方法など募集・採用活動の見直しや、研修委員会の改組を実施。

その結果、マッチング者数、中間発表1位指名者数ともに回復傾向に転じた。「組織改編で研修委員会に研修担当事務部会を設置、その下部組織として常設の小委員会が活動の中心になることで、業務手順の見直し、共有化、実効性のある組織改編につながったと考えられます」とまとめた。

大会終了後、「当院でも取り組みたい発表があったので、ぜひ参考にしたい」（黒木則光・湘南厚木病院院長）、「当院でも口腔ケアチームを作り行っていますが、歯科衛生士の活用もぜひ考えたいと思います。良いヒントをもらいました」（八木沼正子・湘南藤沢病院看護部長）など、自院に取り入れようとする声が聞かれた。

学会形式で発表者が改善の取り組みをプレゼンテーション